



多くの種類から好みの木を選んで施主と一緒に作った「いろいろドア」。  
色の経年劣化も楽しめる

使えない木は一本もない

# 有賀建具店に教わる 雑木の活かし方

あるが  
有賀恵一 (長野県伊那市・有賀建具店代表)

## いろいろな木を組み合わせる

私のところでは、現在60種以上の木を使って建具や家具をつくっています。色にも硬さも重さも違う木を、一つの製品（ドアやテーブルなど）の中で組み合わせる仕事もけっこうあります。

個性の違う何種類かの木で一つの製品をつくることは、今から約25年前、ある施主さんからの注文がきっかけでした。「これだけの木があるんだから、一枚のドアにいろいろな木を入れてほしい」ということでした。

私は修業中に親方（父）から、「一つの製品をつくるには木目をそろえなさい、色をそろえなさい、できれば1本の木からつくりなさい」とたたき込まれてきました。そんな私にとっては、それまでとは反対の仕事ですし、何よりも施主が期待しているものができるのか心配でした。でも出来上がってみると、それぞれの木がケンカすることなく、しっくりと組み合っ一つになり、それぞれが互いの個性をより引き立てていました。施主もたいへん喜んでくれま





いろいろダンス



いろいろテーブル



いろいろな樹種のスタッキングチェア



ミズメザクラのキッチン



イチョウのドア

した。そのときから、いろいろな木を組み合わせることが好きになり、今も続けています。

私のところで使っている木は、一般的に「雑木」と呼ばれ、役に立たないとされている木（主に広葉樹）を何年かかけて天然乾燥したものです。それらを削った見本を使って、施主と一緒に「何の木で、何をつくるか」決めていきます。施主にとっては、この打ち合わせの作業も楽しい時間のようなのです。

### 雑木の値打ちを知った三つのきっかけ

じつは、私はこのドアの注文の前から雑木を扱っていました。その理由は三つあります。

#### ●原生ブナ林大量伐採、パルプ化の衝撃

一つ目は、50年ほど前に東北の山で見た広葉樹の伐採です。私は1950年、長野県の伊那谷に建具屋の長男とし

て生まれましたが、縁あって高校は山形県の飯豊山の麓、ブナの原生林の外れにあった基督教独立学園で学びました。JR（当時は国鉄）米坂線の伊佐領駅から10kmほどの山の中にあり、冬期は雪が3〜5mも積もるため、5カ月間は外の世界と遮断されるという生活でした。その冬が明ける4〜5月にかけて、山から連日チェーンソーの音が聞こえてきました。スギを植えるためにブナを切り、積雪を利用して馬などで里まで運び出していたのです。

当時、スギを植えることはよいことだと思っていました。卒業してから母校を訪ねてみると山の木は見渡すかぎり伐採され、広葉樹の大径木がチップ工場に大量に出ていました。そのものすごい量に圧倒されました。曲がった木あり、細い木あり、名前のわからない木あり、なかには直径1mを超える大木もあり、これらの木がすべてパルプになると聞いて、さすがにもつたないないなという思いを強くしました。